

# カルデア落語

間素田亜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最近落語にハマりまして、自分でも実際にある落語の噺をオマージュしてみました。  
とあるカルデアの英雄王ギルガメッシュの噺。

たとえ同じ物だったとしても、人それぞれに拘りがあつたりするんですよ。

※キャラ崩壊注意です。本当に気を付けてね。

# 目次

カルデア落語

---

1



# カルデア落語

どうも皆さんごきげんよう。

自分は間素田<sup>マス</sup>田<sup>タ</sup>と申す、500万人以上いる人類最後のマスターの内の1人で御座います。

……最近、フレンド申請をなされる新人を見ると、頑張れよ後輩！なんて生意気言ったりしますね。

その後輩は1日も経たずにログインのカウントが止まるんですが、何故でしょうかね？

あ、ガチャのマラソン大会ですかい？ 精が出るねえ……

ではそろそろ皆さんに軽い落語を披露させて頂きたいと思います。

扇子ではなく筆を握った素人ですが、皆さんから苦笑いの1つでも貰えたら幸いです。

皆さん、最近ジャンヌだのエリザベートだのが種類を増やしておりますがどうです

か？

世の中、似ているだけで全く違っていたり、似てないのに殆ど同じ、なんてややこしい事だらけで参りはしませんか？

少し違う話になりますますが薬だと思ったら酒が飲めなくなる健康に良い毒だったのだ、強敵だと思った紫の騎士が、実は只のダメ親父でしたー……なんて事も御座いますね。

世の中は、良い意味でも悪い意味でも裏切りに溢れているんです。私もあるーつの裏切りにあつた王様の話を致しましょう。

かの有名な王様、ギルガメツシユ。

カルデアに召喚されてやって来たは良い物の、レイシフト以外にする事の無い退屈な場所です。

マスターを強引に連れてはあちらこちらの時代でその唯我独尊の態度で問題を振り撒きます。

「童わらわが見たい」

そう言われますと霧の街ロンドンへ繰り出します。

マスターをお母さんと呼び、ナイフを手に持って怯えさせるジャック・ザ・リッパーは王のお気に入りです。

「せめて散り際で我を興じさせよ」

マスターを連れて凶悪な怪物共に向かってゆきます。

無限の財で気持ち良く薙ぎ払うから本人にはゲーム感覚なんだろうが、マスターにとつては下手なホラー映画よりも恐ろしい体験でしょうね。

「雑種、今日は我をブリテンへ連れてゆけ」

今日も今日とて我様全開、我が儘100パーセントの英雄王。突拍子も無くレイシフトがしたいと言いました。

「我の嫁を迎えに行く」

はて？

ならばブリテンでは無く、紀元前のウルクでは御座いませんか？

「我の嫁は、麗しの騎士王だ」

英雄王に慢心どころかとおきの最強宝具すら引き寄せる位の覇気を放つて言われてしまったては憐れマスター、大人しく従うしか御座いません。

「元はと言えば貴様が我の嫁を召喚できないのが原因だ。随分待たせたが、セイバーよ、迎えに行くぞ！」

テンションの高いギルガメッシュと共にレイシフトしましたが、なにせ色々不安定な

システムです。

不慮の事故でマスターとギルガメツシユは同じ時代に別れ、辿り着いてしまったのです。

「……む？ あの金が足りないが気高さが感じられる城は？」

ギルガメツシユが送られたのは、なんの偶然か円卓の騎士が集うキャメロット城の手前です。

「なるほど、やはり我の愛は時空すらも超越するか」

満足そうに納得すると、円卓の騎士が一人、湖の騎士ランスロット卿がギルガメツシユの前に現れました。

「……太古の王、ギルガメツシユとお見受けする」

「ほほう……我の名を知っていると云う事はサーヴァントか」

「我らがアーサー王がお待ちです」

「ふふ、律儀に迎えを出すとは……カワイイ奴め」

ランスロットに連れられ、アルトリアとご対面したギルガメツシユ。

「おお、我の嫁！ ようやく会えたな！」

「……世迷い言を」

喜びの声を上げるギルガメツシュに、アルトリアは唾でも吐き出したかの様な顔で不愉快を顕にしている。

現在アルトリアさんは黒化してはいますが恋は盲目、ギルガメツシュの目には普通のアルトリアと何ら変わらなく映っております。

「ほれ、その顔を我に近付けて見せるといい」

「私は貴様と同盟を組むつもりだったのだが……」

完全に恋の暴走列車と化したギルガメツシュはアルトリアの声も聞かずに席を立ち、向かいに座る彼女の元へと近付く。

「照れ隠しも愛情の裏返しだが……」

「いい加減、我が求愛を受け取れセイバー」

——ギルガメツシュは机の上に置かれた料理の皿を床へと弾いてギルガメツシュは机に自分の手の平を置きましたが、直ぐに手の平は机から離れました。

「つう、つぐふう……!?!」

怒りに震えたままアルトリア・オルタさんはギルガメツシュの頬に倒れる程のピンタをお見舞いしたのです。

「貴様の耳障りな戯言は我慢してやろうと思ったが……」

食べ物……粗末にするなあああ!!」

「は……ははあああ……!!」

そのあまりの迫力にギルガメッシュも急いで膝を折って頭を下げます。

「す、すまんセイバー……!」 我が悪かった!」

恐怖で真っ青なお顔をしておりますが、心なしか両頬は赤く染まっております。

そしてアルトリアはギルガメッシュ目掛けて黒い聖剣を振り抜きます。

「ま、待て! やめろ、セイバー……! 戯れが過ぎ——」

「——問答無用。貴様が床にぶち撒けた料理の様に、貴様の血で城の壁を染めてやろう

……!」

エクスカリバー・モルガン  
約束された勝利の剣!!」

至近距離から放たれた闇を避ける事は出来ずに英雄王は消滅し呆気なくカルデアへと戻って行きました。

それから少し経ってマスターがカルデアに戻ると、英雄王は普段の横暴な態度が少し鳴りを潜めておりました。

普通のアルトリアはツンツンでしたが、オルタのあのツンを超えた敵意に何か感じる物があったのでしょうか。

「……マスターか……丁度良い。これをくれてやるから私の嫁を呼べ。そして直ぐに我との食事を命じろ」

などと言つて呼符を10枚もくれるんですから本当にどうかしてしまつたんでしょう。

まあ貰つたのですから回すだけやつてやりましょう。

一度目……ジルさんはダヴィンチちゃんへ……

二度目……カエサルさんもダヴィンチちゃんへ……

……十度目……ああ、また外れです。

ですがこのまま手ぶらで帰れば何をされるか分かりません。

仕方が無い。

フレンドさんになるべく大人しいアルトリアさんをお借りしましょう。

リレイさんの純粹さならきつとギルガメッシュも心穏やかになつてくれますよ。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じて参上いたしました！」

どうもすいませんね……ウチの英雄王、ギルガメッシュが貴方とお食事を取りたいと言つております……

「ギルガメッシュさんとお食事……ですか？ いえ、問題ありません！ 他の王と話す

良い機会です！ 早速言つて参ります！」

心配ですねえ……大人しくなったとは言え相手はあのギルガメツシュなんですから。ちよつと覗きに参りましょう。

「ギルガメツシュさんは面白い方ですね！」

「そ、そうか……？　そうだろう、そうだろう！」

すつかりリリイに毒気を抜かれておりますね。あんなにみつともない英雄王は初めて見ましたよ。

「……ふんっ！」

と、此処でギルガメツシュは突然、料理の乗った皿を落としました。

すると……

「あ、ギルガメツシュさん大丈夫ですか!?　直ぐに掃除しないと……!　ちよつと、待つて下さいね？」

「お、おう……我は幾らでも待とう」

だらしない顔をした英雄王を置いてリリイは出て行きました。すると英雄王はマスターを指でちよいちよいと呼びます。

「マスター……あの可憐な嫁はどうした？」

「はい！　英雄王が気に入るようにと、人懐っこくて可愛らしい騎士王を選びました！」

そこにリリイがタオルを手に戻って来ました。

「ギルガメツシユさん、今拭いて上げますね」

リリイがそう言うのと健気にも汗の着いたギルガメツシユの鎧を拭いてあげます。

一瞬惚けるギルガメツシユですが直ぐに頭を振ってこう言いました。

「っは!?! いかんいかん……!」

「私の嫁はオルタに限る……!」